平成28年度 特集展示(会期：平成29年１月５日(木)～２月19日(日))
新春酉年企画・福岡県の装飾古墳③

鳥

はじめに

平成29年（2017）の干支は酉です。この特集展示では、新春の酉年の到来を祝い、考古資料から彫刻まで鳥に関連する資料を展示し、人と鳥の古来からのつながりを紹介します。

翼をもち、大空を飛ぶことができる鳥は、人類にとってのあこがれの動物でした。また、天と地を行き交う生き物であることから、神の使い、あるいは、死者の霊魂をのせて天に帰って行くものとして、国や地域を越えて認識されて来ました。

さらには、鶏のように、夜明けを告げる聖鳥とされるいっぽう、家畜として飼われ、卵や肉が食用となるなど人類にとって身近な鳥も存在します。海外では、紀元前からインドやエジプトで鳥の骨や鶏を表現した遺物の出土があり、日本でも縄文時代から貝塚などで鳥の骨が出土しています。弥生時代以降も、鳥の骨や鳥を表現した考古資料・絵画・彫刻作品などが数多く遺り、鳥と人間の関係には長い歴史があることがわかります。

装飾古墳の石室の壁画には、船の上に乗った鳥が描かれているものがあり、神話にみえる天鳥船を思わせます。鳥が神の使いや、霊魂を乗せて行く存在と考えられていたことが窺えます。また鳥をかたどった土器や鳥の形の飾りがついた土器もあり、古墳の祭祀と鳥との深いつながりを想像させます。

鈴付鳥形はそう（部分）

干支は中国の殷代（B.C.17世紀～B.C.1046）から日にちを表すものとして使われ、年月や方角、時刻を示すようにもなりました。十二支が十二獣と結び付いたのは漢代（1世紀頃）です。福岡の東光院に伝来した、薬師如来の眷属として十二方位を守る十二神将（平安時代・江戸時代）の中から、申・酉・戌の三神をご紹介します。

ここでは、展示資料の紹介と解説を行います。

1 鶏形二重口縁壺形土器

小郡市津古生掛古墳出土
古墳時代（３世紀）
小郡市教育委員会所蔵

古墳出現期の3世紀末頃に作られた津古生掛古墳から出土した鶏形土製品。鶏の表情を絶妙に写し取った逸品。頸部には赤色顔料が塗られています。頭部から胴部のみを残す一体は、古墳の西側周溝、もう一体は東側の墳丘裾から出土し、本来は古墳の作出に飾られていたとみられます。

2 鈴付鳥形はそう

朝倉郡筑前町君ヶ原遺跡出土
古墳時代（６世紀）
九州歴史資料館所蔵

はそうとは、胴部に小さい円孔のある壺形の土器で、円孔に竹の管をさし、液体を注ぐ容器です。把手には、扁平な口、胴部の羽根、背面の尾羽が造形された鳥が表現されています。二重底に作り、上は液体の入れ物になっています。下には底に円孔と共鳴用の透かし孔があり、鈴として機能しました。鈴の音とともに鳥が霊魂をあの世へ運ぶのでしょう。

鶏形二重口縁壺形土器（部分）

3 鳥を描いた装飾壁画古墳

九州の横穴式石室の古墳には、内部の壁面に装飾絵画を描く古墳が数多く見られます。それらの中には、鳥や馬などの動物を描くものがあります。

うきは市吉井町富永の珍敷塚古墳は耳納山地の北側山麓の扇状台地上（標高45m）に位置する円墳で、横穴式石室の奥壁には、青と赤で色鮮やかに装飾壁画が描かれています。向かって右側に一羽の鳥を描くほか、左側には船が描かれ、舳先に右側を向いた鳥を一羽描きます。次の鳥船塚古墳の装飾壁画のモチーフと酷似しており、両者の関連性が窺われます。

鳥船塚古墳は珍敷塚古墳と同じ屋形古墳群に包括される円墳で、横穴式石室の奥壁には赤色で、盾や同心円文などと共に大きく船が描かれています。船には帆柱と大きな櫂を持つ人物、さらに舳先と艫（船尾）には鳥が一羽ずつとまっています。古墳の被葬者を黄泉の世界へと送り出す情景を描いているのでしょうか。

築上郡上毛町下唐原の穴ヶ葉山古墳群は福岡と大分との県境山国川に面した丘陵上に位置します。1号墳の横穴式石室の羨道の側壁には線刻壁画が描かれています。その中央には木の葉の上に左を向いた鳥が描かれ、幟も併せて描かれます。鬼塚古墳（大分県国東市）にも類例があります（鬼塚古墳の壁画は後世の追刻の可能性も指摘されています）。本展では、これらの古墳壁画を写真パネルで展示しています。

珍敷塚古墳装飾壁画（部分） 古墳時代（6世紀）

鳥船塚古墳装飾壁画（実測図） 原品：古墳時代（6世紀）

『第51回埋蔵文化財研究集会装飾古墳の展開資料集』より

4 東光院伝来の十二神将

重要文化財 平安時代（12世紀）
江戸時代・寛文7年（1667）
福岡市美術館所蔵

東光院は正式には薬王密寺東光院と呼び、伝教大師最澄が入唐求法の旅から帰った際に彫った7軀の薬師如来の像のうち4番目の像を本尊として開かれたと伝えられます。最初は天台宗でしたが、中世には臨済宗承天寺末となり、福岡藩2代藩主黒田忠之の再興によって真言宗仁和寺末に改められました。本尊薬師如来立像は「堅粕薬師」と呼ばれて古来有名です。

十二神将は病苦を除き安楽を与えるという薬師如来の十二大願にもとづく眷属で、昼夜十二時にわたって衆生を守護することから、のちに十二支の方角神にあてられるようになったとされます。

本群像は東光院本尊の薬師如来立像とともに伝来したもので、12軀のうち江戸時代の寛文7年（1667）に福岡仏師の佐田文蔵朝桜によって補作された申神・酉神・亥神を除く9軀が平安時代後期の制作として重要文化財に指定されています。

東光院伝来の30軀以上の仏像は、昭和49年に福岡市に寄贈され、通常は、福岡市美術館にて公開されています（現在は改修工事のため休館しています）。

本展では酉年にちなむ酉神（伐折羅大将）と、その前年と後年にちなむ申神（安底羅大将）・戌神（迷企羅大将）をご紹介します。

（学芸調査室　酒井芳司）

酉神（部分）

江戸時代・寛文7年（1667）

重要文化財 戌神

平安時代（12世紀）

木造十二神将立像

編集　　発行：平成29年1月5日

九州歴史資料館
KYUSHU HISTORICAL MUSEUM

〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5208-3
TEL 0942-75-9575　FAX 0942-75-7834
URL http://www.fsg.pref.fukuoka.jp/kyureki/